Supplementary Information

巻頭言に対するレスポンス

杉本先生

今指摘されていること端的に強力にありがとうございます
データの良し悪し言われていて
日本は日本らしくと評価してくれる外国人もいるのは確かですが、国際的にみると、今の日本はシステム崩壊していると思います。

三原久和　2013/4/30

杉本先生

どうもありがとうございます。国立大学法人に所属するものとしては、法人化後の通常経費の削減、人件費の抑制に伴う若手人材の減少、業務の増加による研究時間の減少ということから考えて、論文数が増えるのを期待するのが無理というものだと思います。しかしそのような状況下でもグローバル化への対応はより強く求められるものと思います。”アジア大陸からの風”を強く意識してのことだと思います。下記が文部科学省の正式文書のようです。
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/skkkaigi/dai7/siryou07.pdf
14P の「世界大学ランキングトップ 100 に 10 校ランクインに向けて」から、 以降にランキング上昇戦略が示されています。国際共同研究の促進は、ランキング上昇のためであって(科学技術領域における国際競争力、影響力の維持ということだと思いますが)、国際的なサイエンスへの貢献のためではないですよね。

深瀬浩一　2013/5/1

杉本先生

日本のサイエンスが直面している世界における位置付け、役割に対し、マスコミが取り

上げる最近は・・・や、ゆとり教育が・・・的な、表面的コ メントだけではなく、我々、そして我々の先輩をも意識的、あるいは無意識に陥っている日本のサイエンスが抱える問題の本質に切り込んだ巻頭 言・・・大変ありがとうございます。

「外国から輸入した″科学″を次から次へと改良して 科学者の受け入れやすい″科学″につくりかえ、 国内だけでなく、世界中に売り込むよう になった国。世界中を席捲しているメイド・イン・ジャパンを 貫く特徴はどこにあるかというと、 その大半が日本人の独創になる オリジナ ル″科学” でないということである。」
私には、日本の現状のみならず、高度成長期以降の日本の科学における主な研究者の流れを端的に現されている言葉のようも感じられ、自分のサイ エンスへの取り組み方を含め、胸が痛む想いです。

ただ、現在のアジア大陸からの強烈な風・・・この風の根本は、上記の特徴がより色濃く含まれているのではないかと感じています。
つまり、アジア大陸の強烈な流れも、成熟期を迎える頃には同様の閉塞感が襲う可能性も否定できないのではないかと・・・

特に論文数において、国際連携・国際的共同研究に基づく大陸の烈風が吹いている・・・との解析結果には、若干疑問を感じざるを得ない事も事実 では・・・と思う
なぜならば、現在のアメリカ、ヨーロッパの先端的大学研究室における主要戦力は、大陸の大学に籍を置く交換学生や若手研究者、ポスドクで有 り、彼らが手を動かした仕事が IF の高い論文に掲載されるのは、主に所属研究室のオリジナリティーとレベルの高いプロジェクトの結果であり、 発表される際に併記される大陸の大学・研究室の共同研究に対する真のコントリビューションがどの程度であるか・・・若干の疑問をはさまざるを 得ない気がする。

とは言っても、実際に大陸研究室独自の研究、さらには真の共同研究に非常にオリジナリティーが高く、素晴らしい仕事が急速に増加している事も 事実である。

日本のサイエンスが風前の灯火・・・この危機感を日本の科学者が共有し、上記特徴を認識し、独創的な日本人の発想に基づくオリジナルなサイエ ンスを提案し、実証していくモティベーションに代える事が出来れば、ピンチがチャンスに・・・も夢ではないのと微かな希望を抱きます

某大学の前学長が世界大学ランキングトップ 30 以内に！なんてプランを掲げた時...
科学者が世界的評価を上げるために研究に勤しむこと…そ んな事は本末転倒ではない

かと感じました。
杉本先生が提言されている、輸入した科学を改良する事により受け入れやすい科学に加工する・・・そんな小手先ではなく、これまで日本独自に築 き上げてきた独自の基礎科学をも活用し、日本発の科学を創造する事を目指す・・・その結果、世界的評価が当然上昇する
むしろ、杉本先生の巻頭言にも記されているが、研究テーマ・目標設定が重要である。国際協同を行う事により、世界の時流に乗り遅れる可能性をある程度低減できるであろう・・・ただ、先ず国際協力、国際連携、国際協同研究があ りきでは、サイエンスが正しい方向に進展するとは期待し辛い。
ただし共同研究・連携はあくまで交流の結果であり、共同研究という形を優先するのではなく、交流を進めながら必要に応じて本格的な共同研究に 進めるべきでは・・・と考えます。
共同研究前提の交流は行事を増やすばかりで肝心の研究をおろそかにする可能性もあるのではないかと危惧してしまうのは老婆心でしょうか…

三原さん、深瀬さんが書かれるように、いまや大陸の潤沢な研究資金・極めて優れた研究設備・学生への奨学金や研究者/教授の好待遇・・・比較 して、雑用や学部教育の変化の波、そして任期付き雇用と評価等に翻弄され時間的制約が多く疲弊状況にある日本の若手研究者・・・これらの状況 改善が急務である事は言を待ちませんが…

先ずは、グローバルスタンダードでリスペクトされる研究テーマの設定・・・その意識と、実行が重要では。。。と思います。
昨年の ISBC でフロンティア生命化学研究会の若手の発表・・・素晴らしかったとの思い、そして彼らに続く人材の育成が必要不可欠。急務であ る事も念頭に・・・

取り急ぎ私感・雑感まで・・・

和田健彦　2013/5/1